



スウェーデンのお墓

レグランド つかぐち 塚口 よしこ 淑子 ●ノルデック出版・代表

自宅から散歩にちょうど良い距離のところにお墓がある。

公園墓地とでもいえようか、敷地は広大で森や野原が延々とひろがっていて、じつに気持ちが良い。

一口にお墓といっても、スウェーデンでの在りようはじつに多様で、そこからこの社会が見えてくる。

たとえばスウェーデンのお墓は、苗字が違っていても一緒に入れる。市内のある教会墓地で花を供えていた年配の女性はその例に挙げられる。お墓は亡くなったひとり娘が住んでいた教区にある。つぎに亡くなったイギリス出身の娘さんのパートナーもそこに入った。

最後にそのお墓に入ったのは、花を供えている女性のお連れ合いである。地方の出身地には親の墓があるが、そこにはもう親戚や知人が誰もいない。それで最愛の娘さんの家族と一緒にいる方を選んだ。

小さな墓石には4人の名が刻まれるようになっている。一番下の空いているスペースは、墓参りの女性の場所である。彼女は、ひとり娘夫婦と夫の4人で、死後ずっと一緒に過ごせるのは幸せであると話した。墓石の苗字はふたつある。

また、つぎのような例もある。散歩のついでに見かけた「家族の墓」と刻まれた墓石には、5つから7つくらいのファーストネームが気ままに散らばっているだけだった。名前から性別だけは分かるが、それ以外、彼らがいつ生まれ、いつ亡くなったのかなどは分からない。その家族の姓名もひ

とつなのか、それとも複数なのかも分からない。しかし、家族と一緒に仲良く眠っている様子がなんともほほえましい。

家族の成員がファーストネームだけをもつ個人として一所に眠るのを選択できるなんて悪くない。家族名に左右されるより、生前の絆と一緒に眠る人を選ぶ決め手になるからだ。

もちろん、伝統的な墓石もある。典型的なのは、「家族の墓」とある下に、家主である男性の生前の職業が刻まれていて、つぎにその人の名前、誕生日と命日がある。それから妻や、未婚で亡くなった子どもたちの名前が続く。極端なお墓の場合は、「家族の墓」の下に家主名だけしか刻まれていない。これらのお墓は、家父長制度が支配していた時代を証言している。

見る限り、現在の墓は夫婦と未婚の子どもからなる核家族単位であり、名前と生歿年月日だけが記されているのが一般的だ。「家族の墓」はあまり見られない。同棲・離別、結婚・離婚が目まぐるしく繰り返される昨今、「家族」はいかに移ろいやすいものであるかを皆が知ってしまったからだろう。

ひとりで入るお墓

一部には知られているが、スウェーデンではどこの墓地にもミネスルンドと呼ばれている無名・無縁がベースの共同墓地がある。敷地にゆとりのある墓地では、眺めのよい丘などがそれにあてられている。花を供える場所やベンチなどが置



幼くして亡くなった子どものお墓

かれ、死者とゆっくり対話できるように配慮されている。骨壺はその区画のどこかに埋められるが、灰として撒かれる場合もある。

このミネスルンドの特徴は、生前に希望しておけば誰でもそこに埋葬してもらえることだ。親子きょうだい親戚などの係累には一切関係なしに、そこで個人として眠る。そこに葬られている人たちは知らない者同士で、バスや電車にたまたま乗り合わせた人たちと同じ場所に眠っているようなものだ。

家族の歴史を見ると、親戚なども含む大家族制度から、三世代家族、さらに核家族と、家族構成の成員数がずっと減少していく傾向にあった。家族のサイズがだんだんと小さくなり、究極的にはひとり世帯になるのだ。

スウェーデンに限らず、いまでは大都会の世帯の半分は単身世帯である。ミネスルンドのような場所があれば、死後の心配なしに“安心して”死ぬことができる。そこに葬られている人を訪ねて、色んな人がひっきりなしに訪れるからだ。供えてある花もふつうのお墓同様、盛り沢山ある。だから、ひとりでミネスルンドに入ってもさびしくない。

各個人が無名というのが原則のミネスルンドであるが、最近、少し傾向がかわってきているようだ。墓地によっては、入口のところはかなり大きなプレートが打ちつけてあり、希望すればそこに自分の名前を彫りこんでもらえる。興味深いこ

とに、無名の人たちが集まると、一つの集団ができあがる。「他人同士の我々」として、スペースを共有しているのである。ポスト核家族から「知らない同士」という、れっきとした新しい社会集団の誕生である。地縁、血縁、社縁などの他に、この国では「他人縁」が出現している。

福祉の国の死後

日本にくらべると少ないが、それでも葬式にはお金がかかる。その費用がない場合、自治体から「葬式金」が出る。この間、テレビで観たが、葬式は公費でできるが現行の規則には墓石は含まれてないとあった。とにかく、葬式金を生前用意しておく必要はない。

また、国籍や宗教に関係なくスウェーデンに登録されている人は全員、自分の墓場をもつ権利があるそうだ。経費は税金で賄われ、葬られてから25年間無料で墓場を維持できる。複数の人が入る場合は、最後の人が入った時点から25年間の墓地権と計算される。その期間が過ぎると、地方によって異なるが、有料あるいは無料でさらに15～25年間の墓地権が更新できる。

「ゆりかごから墓場まで」とはよく言ったものだ。この国では死んでからも、最低25年間は続けて地上に存在することができるのである。

著者は2013年9月4日にご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。